

世俗化と宗教社会学の存亡

— C I S R の歴史と問題関心 —

ブライアン・ウィルソン

小松 加代子 (訳)

I

宗教を社会学的に解釈しようとする学者の国際的学会である国際宗教社会学会(C I S R)のそれぞれの大会は、少なくとも西洋、とりわけヨーロッパ諸国におけるその分野の研究者の関心の動向を判断する上で、はつきりとした指標となる。宗教を社会現象として見る風潮は、会議に提出された数々の論文によって、さらに二年ごとに開催される会議に選ばれたテーマによって、最も明瞭にみてとることができるだろう。過去二十年間、これらの

会議のために選ばれてきたテーマはほどよく分散されていたものの、世俗化は研究に携わる人々にとって心にかかる最も顕著なものであった。実際には、過去二十年間に国際宗教社会学会が会議のテーマとして世俗性の問題を表立って選んだのは一回だけであった。それは一九七一年のユーゴスラビアでの第十一回大会のテーマ『無神論と無信仰 (Atheism and Non-Belief)』である。確かにこのテーマは世俗性を扱ってはいるが、このテーマさえも、直接的に世俗化そのものを取り扱っているわけではなく、むしろ公然化した世俗主義を扱ったのだといえ

る。つまり、扱っているのは無神論というイデオロギーであって、世俗化理論の中心となる構造的変化の過程ではなかった。過去二十年間、他の二年ごとの定期大会は、世俗化とはかなり性格の異なる主題に費やされてきた。それらは例えば、宗教の測定と類型化 (Measuring and Typifying Religion) (一九六九)、現代宗教の変容 (The Metamorphosis of Religion) (一九七三)、宗教と社会変動 (Religion and Social Change) (一九七五)、シンボリズム (一九七七)、宗教と政治 (Religion and Politics) (一九七九)、価値および日常生活 (Values and Daily Life) (一九八二)、宗教と公的領域 (Religion in the Public Domain) (一九八三)、宗教と近代性 (Religion and Modernity) (一九八五) 等である。例外的な一九七八年の国際宗教社会学会東京会議においてのみ世俗化が表立って問題とされたが、その時でさえ新宗教及び宗教意識と並んでその内容を分けることとなった。しかし、このような形で大会用のテーマが明確に分散していたにもかかわらず、国際宗教社会学会は世俗化の問題に第一義的に関わりあってきたという印象が残る。

出版された大会紀要を見ても、国際宗教社会学会の実行委員会で世俗化の論議を他の議論を犠牲にしてでも進めようという意図的、あるいは承認された方針がもちろんあったわけではない。少なくとも、個々の大会のテーマの選択、特にチュービンゲンでの第十九回大会に向けてのトピックの選択に関する限り、そのテーマは最近流行の話題を繰り返すというより、新しい出発点ともいえるものである。つまり、宗教領域における事実上の主要現象として世俗化を認めようとし、あるいは認めることを避けてきた実行委員会は、この時点ですべて一つの機会、十回に一回をこの主題に費やす必要のあることを認めたのであった。過去二十年間を通して、この主題とは明らかに別個のテーマを選んできたにもかかわらず、国際宗教社会学会は世俗化に占領されているという印象が残るならば、これは参加者それぞれが独立に提出した論文の実質的内容に基づく結果であるとしきれない。それらの論文を分析すれば、現在議論されている宗教の他の研究対象にしても、遅かれ早かれ、ほとんどが必然的に世俗化という一般的な問題にまつ議論へと

導かれることが分かるであろう。このように、各々の会議は別のテーマによって方向付けられているにもかかわらず、世俗化が国際宗教社会学会の議論を支配しているように見えるのは、研究者の経験の中で、世俗化が正に現代の欧米における宗教の最も顕著な問題の一つであり、他の宗教的問題が考慮されているときでさえ、無視することのできないものとなってきたからである。

私見によれば、社会学者が世俗化に深く関わる現象は、分析のモデルとしての聖と俗というデュルケムの二元論に特に由来しているわけではない。この理論的構築自体、私はその普遍性にかなり疑問を持つてはいるが、世俗化過程の人為的構造物に過ぎないように思える。聖と俗がユダヤ教とキリスト教において、はっきりと区別されるべきだということは、超自然的概念をある特殊な行為、対象、位置、そして季節から分離することを意味しているにすぎない。様々に異なった社会発展の条件の下では、宗教的領域がキリスト教の伝統の中で聖なるものと受け入れられているものよりも、広い現象や経験にまたがってはいけないという理由は何もないようにみえる。宗教

社会学者が世俗化の評価にいやおうもなく関わっているのは、構造上の根本的な変動過程に由来しているのであって、社会組織の分類や概念化の付随現象として生じているのではないと私は信じている。

しかし、ここで世俗化論によって何が意味されるかははっきりさせておかなければならない。第一次大戦後にとりわけ顕著であった宗教上の様々な変化によって、ヨーロッパの社会学者、及び同時期の神学者や聖職者が強く印象づけられたということは驚くにあたらない。このような変化、例えば教会出席率や通過儀礼への依存度の変化（特に洗礼と堅信礼）、聖人への捧げ物等に見られる変化は既に明らかな事実であったが、数量化技術を用いた社会学者達は、そうした社会変動の過程をさらにはっきりとした形で記録することができたため、改めて目を見張らされたのである。それだけではない。宗教社会学者は教会の権威者、特に宗教社会学を潜在的に司牧神学（Pastoral Theology）にとつて価値のある補助的なものだと思ふ傾向にあった聖職者達によって招かれ、この種の変化を調査するよう依頼されることもあった。衰退

の過程は、その進み方がいかに異なろうともヨーロッパを通じ実質的には普遍的で、既に漠然と「世俗化」と呼ばれるか、もしくは少なくともその堅固な証拠であると

考えられていた。明らかにこの「世俗化という」言葉は、活動、財産、力、社会的地位、信念、知識が超自然的であることを止め、明示的であれ暗黙的であれ非宗教的なものとなるような、広範囲に渡る複合的な社会過程のどれについても当てはめられる。しかし、この言葉が世俗化論の中でもっと慎重に用いられるならば、それはかなり特殊なものを意味するのであって、教会出席率や超自然的リアリティーから引き出された信念の表明などといった偶然的証拠に条件づけられたものを意味するのではない。この文脈において「世俗化」は、宗教的信念、習慣、制度の社会的意義の衰退を意味する。「世俗化」で指し示されるのは構造的過程、つまり社会組織内で変化する宗教の役割である。そこにおいては、宗教的慣習の変化については直接的にはなく、婉曲にその証拠がほめかされているに過ぎない。宗教的慣習の変化はそれ自体興味深い現象で、その重要性は反論の余地もないが、

それ自体では世俗化の実質を構成してはいない。それらは、世俗化の主要な、あるいは最も直接的な証拠とはいえないのである。

II

宗教の社会的意義、なかでも社会的構造と社会的秩序を保つ役割は欧米においてはもちろんのこと、とりわけヨーロッパにおいてはつきり認識されていた。政治的権威者達は宗教の果たす機能によく気づいており、意識的にあれ無意識的にあれ政治権力の正当化装置として、社会統制の媒体として、社会政策の支持母体として、若者を社会化する主要な道具として、宗教を利用した。宗教がこうした機能を果たす限りは、社会構造における宗教の意義は自明であった。キリスト教という排他的な神教のもとでは、キリスト教に代わる宗教信条や習慣は簡単には許容されるはずもなく、従ってキリスト教の公式機関と国家との相互依存が発達した。ヨーロッパのどこにおいても国家の後援する教会、プロテスタントの国々では国家が設立した教会が存在した。何世紀もの間、

公定宗教に忠実であることは、多かれ少なかれ誰にとっても義務であり、国によってその程度は異なるものの、義務が単なる社会慣習に取って代わられたときでさえ、宗教的恭順は社会慣習の一部として存続したのである。主要な宗教的伝統の変化とともに、自由の尺度が次第に寛容になった所でさえ事情は同じであった。十九世紀になっても、宗教的慣習は義務でなくとも、極度に強い社会的圧力の対象であり続け、ほとんどの地域で人口の五〇%以上が宗教的行事に定期的に参加する、あるいは事実上全ての人が何らかの宗教の信奉を表明していた。早くから、広範囲にしかも確実に宗教的寛容の発達していた国々——主にイギリス——では、教会の政治的、経済的力の現実的な低下と、宗教を信奉し通過儀礼へ参加し、また（我々が語ることでできる限りでの）具体的な形態での信仰と関係する人々の実際の慣習との間には、文化的遅滞が存在した。

早くから警告を発していた人もいなくはなかったものの、一般に社会を研究する人が、宗教的慣習が根本的な変化を被っていることを認識し、そしてそこから、社会構

造にとって宗教が以前からもっていた意義の多くを事実上失ってしまったということに気づいたのは、やつと第一次大戦の終わった後であった。しばらくは、教会がそれまで教会のものであった影響力をまだ行使できて、いるかのように存在することができた。けれども人々は次第に、社会がますます超自然的な基準とは異なった基準に基づいて機能していることを認識するようになり、従って教会とは異なる路線にそって自分達の生活を秩序づけるようになってきたのである。

世俗化の中心過程を、宗教的信念および慣習上の変化といった派生的、あるいは結果的なパターンから区別するならば、教会出席率のような社会現象は、文脈、国、時代によって異なる象徴的・文化的形式として理解すべきだということがすぐにも明らかになるに違いない。例えば教会出席率は、社会組織の中心的機能操作が超自然主義的目的によって方向付けられ、管理されている度合からは相対的に独立して変化するため、教会出席率の数字を見て、すぐさまそれを世俗化と認めるべきではない。数字は、幅広い文化的、歴史的、政治的要因によって影

響されており、また威圧やしきたりの残存パターン、あるいは例えば宗教を政治姿勢、民族的同一性（Ethnic Identity）の代替表現として用いるという事情などから複雑な要因を含んでいるであろう。従って、このような世俗化理論は、宗教形態や慣習に自発的に加入する個人の数の増減についての予測を許さない。

とにかく欧米社会で、その主要な制度的領域——経済、政治、防衛、法律、身分制度、知識と教育、健康——が、広範囲に渡って世俗化されてきているということを認めるならば、宗教はもはやかつてのような社会制度の中心的位置を占めてはいないということが認められよう。私にとってこのことは不可避的な結論であるように思える。この結論は、専門が宗教社会学である人々には脅威として映るだろう。しかし、（神学者や聖職者と異なって）社会学者は倫理的中立性の原則にのっとり、個々人の好みをいれてはならない。また個人的関心（職業、知的投資、学者としての地位）でさえ、自らの客観的研究が導き出す結論に影響を与えてはならない（それに対して神学者や聖職者達は、自らの規範的前提を専門的意見の中に持つて

いることから、彼ら特有のもっと大きな矛盾の内に入り込んでいるだろう）。

宗教が社会構造上の意義を失ったと認めることは、その分野を放棄することではない。たとえ宗教がもはや経済の傾向を告げず、政府を正当化することもなく、社会政策を示唆したり保証することもせず、教育を方向づけなくとも、宗教は重要な文化的意味あいを持つ現象として存続している。今日の民主主義社会において宗教はその社会的意義を社会生活の他の領域、つまり人々が自身自身の価値を選択し自分自身の意見行使する自発的な領域に存在するのである。宗教は世俗化の過程で消し去られることはない。ただ最も粗雑な世俗主義者の解釈だけが、宗教は消え去るという結論に至ったのである。世俗化理論によれば、宗教が以前とはかなり異なる機能として存続するだろう事は常に予測できた。経験からしても、宗教が社会の統合的な部分から外れようととも存続していくことは明白である。社会組織は世俗化されるかもしれないが、全ての人々が世俗化されるわけではない。社会はますます合理的基準に従って動くが、少なくとも

多くの人々(多分ほとんど、あるいはほとんど全部ともいえる)の生活のある部門においては、そうではない。宗教は不変の関心であり、少数派であろうともある人々にとって、生活を決する関心で在り続けるのである。

III

現代社会では宗教は本質的に自発的なものとなっており、宗教を必要とする人々、あるいは自発的に宗教に魅せられた人々を動員している。現代の社会構造は、あるとしてもごくわずかな場所を宗教に許容しているにすぎない。社会制度も公式には宗教に対して中立な立場を(アメリカでは結果的に、ソビエトでは意図的に)取っている。それにもかかわらず非公式に(政治、経済、マスメディア、教育過程で)エリート階層は、容認されている宗教的伝統、そしてアメリカにおいては宗教そのものに好意的な傾向を示す。また欧米諸国では、少なくとも過去において社会化と市民的善意(Civic Goodwill)の普及は、宗教を媒介とすることによって他のどんな手段によるよりも効果的に促進された、そして現代も促進

されるであろうといった認識さえ存在する。また構造的には位置づけられないものの、宗教は社会の機能を円滑にするものと、一般に広く認識されているかもしれない。しかし、現代においては、一般の人々の知的水準の高まりに伴って、かつての潜在的な社会化機能の恩恵を得るために、ましてやそれを主要目的とするという単純な理由のみでは、宗教は支持されないのである。

現代社会を特徴づける自発的関与は、関与した人々の内に市民的善意を作り出すかも知れないが、そうした人々は人口全体のほんの一部分を占めるにすぎない。しかも規則の欠如した今日の自由放任社会では、彼らが制約、規律、秩序、一般的善意、そして他者への奉仕などを求めるために、宗教には関心を示さず、従ってそれに付随するいかなる徳をも求めない他の人々から攻撃されやすいのである。宗教自体の自発主義(voluntarism)こそが、宗教性を社会的に決定するものは何か、そして社会化の程度の異なった集団の間にある社会的生活状態の違いとの関係を査定し、調停するものは何かといった、研究の必要な領域を明らかにするのである。

ある意味では、宗教はその自発主義によって、現代人が自由に自分の時間やエネルギー、技術、富をそそぎ込んで他の活動と同じレベルへと退けられたともいえる。それにもかかわらず、特に信者によって、宗教はスポーツ、趣味、あるいは娯楽の持つ意義と同じものではないが、それを他の活動よりもさらに真剣に見つけ出させてくれると考えられている。人間はますます、慣習やしきたりによって制約されなくなり、自発的な選択としての宗教的選択がいよいよ本質的な重要性を持つようになるだろう。少なくとも宗教は、他の全ての気ままな自発的活動と同様に継続的な研究に値するものとして残っている。宗教は少なくとも他の自発的集団(例えば労働組合)に関わっているのと同じくらい多くの大衆が関与している。宗教は自由時間を使う他のやり方よりはもっと真剣に考慮されるべきだという主張がなされ、(少なくとも公式のレベルでは)宗教は一般に全体を包括する哲学と称するものによって書かれているため、より深遠な、より徹底的な研究に値する関心領域として事実上受け取られている。

いまだに宗教が独自の性質を持っていると主張されるのは宗教の持つこの側面による。人々は種々雑多な好み、熱意、関心といった個別の目的を実現しようとして集団に参加するが、一方宗教はそれらに比べてより広くかつ深い関係をつくる。宗教組織は何よりも価値集団で、つまり潜在的共同体である。宗教集団は共有された価値——流行の言葉では究極的関心——に基づいて人々を引きつけるのであって、(地位、力、経済的繁栄、身体的楽しみといった)狭い特殊な関心の実現のためではない。もちろん様々な宗教によって実際の共同体となる能力には違いがある。加えて現代における宗教性の表現は、共同体の結束に不可欠でかつ全ての本質的価値の必要構成部分であるこれらの要素を、大幅に減少させているのも事実である。技術的手順(その原始的形態では魔術に近いのだが)の占める割合が大きければ大きい程、宗教は強力な共同体的表現とはなりにくくなる(精神療法的グループはこの状況に最も近い)。しかしながら、全体としてみるならば一般に、宗教集団はそれより特別な関心に従っているから、典型的な利益集団とは通常異なっ

ている。

このことから、宗教は人間集団を形成するための深遠な展望を持ち、また広く、イデオロギー的にも、知的にも、感情的にも基礎づけられた人間集団を作り上げる潜在能力を持っているといえる。宗教は、今も慰めや（「全体性」の意味での）治療とともに「意味」を広め、アイデンティティの和解と授与を容易にする媒体である。宗教は多くの事例で示される通り、自らを正当化する共同体を（その共同体が地域的に隔離されようとされまいと）作り上げる能力を持っているからこそ、そのような機能を達成する機会を手に入れるのである。しかしながら、世俗化という事実を認めるならば、これらは公的に超自然的なものを認めなくなってきたすべての社会組織のために達成される機能ではなく、むしろ個々人や自己選択グループのために達成される機能であることに注意しなければならない。このようなグループ化が生ずるべきである、あるいは人は自分自身の中でそのような共同体とそれを助長する超自然的なものの暗示とを関連させることにより、自らの生活を効果的に規則づけていくべ

きだという主張を見れば、現代人が何を必要としているかが分かる。社会組織の公的な働きによつては、それは満たされないものである。宗教はかなり私的なものとなり、宗教が応える要求は正に慎重なる自由選択の領域に残されたものである。そういった要求はそのような社会組織自体にとつては取るに足らないものなのかもしれない。しかし、その種の要求は確かに現実的なもので、それを経験する個々人に様々な宗教的行為のパターンをもたらしている。

このように宗教は、急激に世俗化された社会においてさえ、中間組織の形成のための基盤を提供し、個々人が媒介変数を認識できる場を提供するといった非常に重要な媒体でありうる。そこでは、顔のない公的な官僚制と国家機関とが、もっと満足のいく情緒や、感情的な安全性の文脈によつて取つて代わられる。たとえ逆説的に、社会制度が組織され支配されている、厳格に合理的な技術的秩序の規範を拒み、それを乗り越えるような信念や活動を行う集団に加入することによつてのみ、その安全性が得られるとした場合でさえもそうである。事実、こ

の文脈における宗教の主張の一部は、健康、教育、道徳、共同体的生活の領域での世俗的合理性の公式認可に対して、真つ向から挑戦する能力なのかもしれない。このような事情はロシアで顕著にみられるだろう。ポーランドやイランでの政治的側面（かなり説明可能な地獄的理由で）においてさえ、明かである。暗示的には、例えばアメリカの特殊創造説（creationism）の存続にみられる。ここまでの議論が受け入れられるものならば、世俗化理論は宗教が消え去ることを予測しないし、存続している宗教性の研究を排除しないといえるだろう。事実その反対こそ真である。全ての現代社会組織で起きた、あるいは起きていいる非常に強力な世俗化過程によつて、——今や自発的活動である——宗教は、社会学者を興奮させる関心の中心的話題となつている。その研究はさらに、人間社会における基本的、不変的傾向について何かを明かすことになるかもしれない。こうした宗教の特徴は広がる世俗化過程の受容によつて高い安堵感を生み出しており、従つてこの文脈の中で宗教を見るべきであるということ認識するだけでよい。もし宗教社会学者がその

会議で世俗化という事実に取りつかれているとしたら、それは我々の時代にある主たる現象の当然ともいえる認識であり、どこに存続しようと宗教の意味と意義についてより深い理解をめざす一段階を作るものなのである。

（オックスフォード大学教授）

（こまつ かよこ・筑波大学大学院）